

2017年3月10日



第68号

HYAKUSHO-HYAKUSHO. HYAKUSHO-HYAKUSHO.

百姓百生

その61

土地の買収には、

未来を考える思想が必要だ

宇都宮高明さん

HYAKUSHO-HYAKUSHO. HYAKUSHO-HYAKUSHO.

なりた 成田市議会議員の^{うつのみやたかあき}宇都宮高明さんは、実験村が発足して間もない頃のイベントに顔を見せ、「実験村の可能性」について熱っぽく語っていた印象がある。かつては空港公団職員として農家と直に用地買収交渉を行い、いわば「反対運動の切り崩し」を第一線で担った人が語る「実験村への思い」は、当然ながらかなり気になった。

だから一度はちゃんと話を聞いてみたいと思い、それがようやくかなったの面会だった。ところがお会いすると直ぐ、ほとんど面識の無い私に向かって「実験村への思い」を勢いよく話し始められた。彼の方にも、私たちに伝えたいことが沢山あったのだ。

面会を前に宇都宮さんのホームページを改めて閲覧し、『つち』を『コンクリ』に変えた責任を自らのものとし…』という一節に再び行き当たった。この一節の真意をぜひ聞いてみたい！ そんな思いを強くしていたので、それをぶつけてみた。

すると宇都宮さんは、1枚のコピーを見せてくれた。財団法人・花と緑の農芸財団発行の平成19年（2007年）の刊行物に、理事として書いた「巻頭言」である。「この大地は先祖から譲り受けたものではなく、子孫から借り受けているものである」と題された文章の冒頭には、「これは、ネイティブアメリカンの古くからの言い伝えであるといわれています。（中略）



さんりづか 三里塚闘争時の空港公団用地部職員として『つち』を『コンクリ』に変えることに直接参加した私にとって、この教えは大切な指針です」とあった。

花と緑の農芸財団は、宇都宮さんが学生時代から関わってきた「花と緑の運動」がルーツだ。難民孤児救済活動を通じて当時のベトナム戦争の悲惨さを見つめながら、同時にテト休戦の街にあふれる花に「心のやすらぎ」を見出すことで掲げた「花の革命」フラワーレボリューションの運動だ。その宇都宮さんが前述の「言い伝え」に出会うのは、政府交換留学生としてメキシコ滞在中の1972年（昭和47年）だった。そして22年後の1994年（平成6年）、彼は成田空港問題円卓会議でこれと同じ理念に出会ったのだ。

「^{じそん}児孫のために自由を^{りつ}律す」という反対同盟の提起は、いわば「指針」との再会だったろうし、「地球的課題の実験村」構想は「指針」を活かす道標だったのではなかろうか。「花と緑の農芸財団は、私にとって実験村そのもの」と言う彼の言葉が、そう思わせる。「空港用地の買収は、道路とは違って“面”を買収する事。だから地域の

未来を考える思想が必要なんだ。「今回の『第三滑走路』^{うんぬん}だって、その建設の可否や騒音対策云々以上に、それを作る場合の地域の未来構想をどうするかが一番大事なことだし、その原案は実験村構想としてすでにあるんだから、これを活かすべきなんだよ」。

成田空港がすでに社会的に機能している以上、それを周辺の地域社会といかに調和した存在にできるのか、その構想を地域の側から提唱する^{いしずえ}礎が実験村構想なのだと、宇都宮さんは言いたいのだと思った。

事務局・佐々木希一

年次寄合い ご案内

2017年4月9日（第二日曜）午前10時から夕立の森（芝山千代田）で、2017年度年次寄合を開催します。

地球的課題の実験村が実践的な活動をはじめた1998年から20年の歳月が流れようとしています。

この間の実験村の活動は、空港建設の過程で失われた北総台地の自然環境の再生（北総大地夕立計画）や地域に根づいた食文化の再生（麦・大豆畑トラスト）を大きなテーマとしつつ、昨今話題のバイオ・エネルギーの紹介や実践的グループとの交流、あるいは太陽光発電の積極的導入など各種の先進的な試みとの連携を模索したり、アジアやアフリカの農民たちとの国際的な交流の輪を広げてきました（食と農のネットワーク）。

しかし他方で実験村は、^{さんりづか}三里塚・^{しばやま}芝山の地で確固たる地域的基盤を作り上げてきたとは言えませんし、全国的にも新しい仲間の輪を広げてきたとも言えない現実があります。

ところが昨年「四者協」による「新滑走路建設」の提案が、逆説的ですが、実験村という「地域の未来を構想する」運動の大切さを改めて私たちに気づかせてくれることになったような気がしています。

巨大空港という既成事実^{もと}に目を奪われるあまり、実験村構想の素になった北総の風土と農地がはぐくむ文化や思想に背を向けては、人々が得心する地域の明日を提唱することが出来ないという事実が、地域の人々が上げる声で明らかになってきたからです。

20年の歳月を経て、そうした実験村の存在意義を改めて考えはじめる年次寄合にできればと考えています。

事務局：佐々木

プロジェクト活動報告

麦・大豆畑トラスト

金森史明

2016年度も麦・大豆トラスト畑へのご参加、ありがとうございました。

収穫量は、大豆が約240kg、麦は無し（種・麦^{こやし}麴用くらいはありました）でした。今年大豆は種まきのころから雨が多く発芽不良のものが多かったです。その後の除草は順調でしたが天候不順により生育があまりよくなかったように思います。麦については雑草が繁茂しすぎて機械での収穫ができず、今年も手作業での刈り取りとなりました。たくさんの方に麦刈りに来ていただきましたが、大豆の種まき準備のため、途中で収穫を断念いたしました。

年々、畑作業に来られる方の人数も減ってきていて作業が大変です。また、毎年、麴を作ってくれていた方が諸事情により麴づくりをやめてしまうことになりました。来年のみそづくりをどうしようかと頭の痛い課題です。



※麴づくりを引き受けてくださる方、あるいは麴づくりをお願いできそうな方をご存知の方、ご連絡ください（事務局）

プロジェクト活動報告

北総大地夕立計画

平野靖識

月に一度、たいていは第3日曜日に芝山町しばやま小寒田こがんだの夕立の森に入り、一日きこりの作業で軽い汗を流しています。夕立の森自体の掃除は終わり、去年は隣接する菅沢さんの杉林の篠竹刈り、倒木の処理、つる植物のつる刈りなどを進めました。この林もだいたいのめどが立ったところです。

先日、菅沢さんと会う機会があり、夕立の森の細い農道を挟んだ向かい側の杉林が、間伐していないため杉が密生し林内が暗くなっていること（写真）を話し、私たちが間伐と下枝落としのお手伝いをやりましょうかと申し出たところ、「やってくれれば喜んでお願いしたい」との返事でした。近いうちに切る木に印をつけておくとのことなので、今後しばらくは、間伐と下枝落としが仕事になります。この作業が進むとお向かいの林も明るくなるでしょう。

懸案の『あずまや』の再建ですが、人手と技術不足のため進んでいません。時期の到来を待つ、ぜひ再建を果たしたいものと思っています。



食と農のネットワーク

大野和興

実験村のネットワークはTPP反対運動、アジア農民交流センターと組んでのアジア農民交流、国際有機農業映画祭、JVC（日本国際ボランティアセンター）などつながりながら展開されています。以下主な取り組みを紹介します。

【TPP反対運動】TPPはトランプ米大統領の出現で、アメリカが離脱を宣言、死に体となりました。しかし、安倍政権はあくまでTPPにしがみつくとということで、日本政府として批准を国会で議決しました。私たちは批准阻止を掲げて国会行動や集会などを行いましたが、批准を許してしまいました。トランプ政権はTPPに代わりFTA（日米自由貿易協定）の交渉を主張、安倍政権はそれを受け入れ、この4月から協議が始まります。TPP以上の厳し条件が容認されることになりかねません。これからはここに焦点を当てた運動に取り組む必要があります。

【アジア農民交流】2016年度はタイから百姓で農民運動のリーダーのバムルン・カヨタ氏一行を三里塚さんりづかに迎え、交流しました。今年度は11月初旬にアジア農民交流センターがカヨタさんを訪ねて東北タイの農村に出かけます。実験村としても希望者の参加を募ります。また、11月には成田なりたでアジア農民交流センターの年次寄り合いを計画しています。実験村として現地交流をしたいと思います。

【国際有機農業映画祭】実験村として毎年協賛し、農産物販売のブースも出してきた映画祭ですが、16年度で第10回を迎えました。今年も、映画祭に協力していきます。

エステバンさん・ウィレモさんと「ミルパ」で交流

—「プロサバンナ計画」でJICAに抗議のため来日—

日本国際ボランティアセンター 渡辺直子

昨年11月30日、アフリカはモザンビーク共和国の北部ナンプーラ州に暮らす小規模農民組織のリーダーのコスタ・エステバンさんとジュスティナ・ウィレモさん（全国農民連合UNA Cナンプーラ州支部の2万人のメンバーを率いています）、が、石井恒司さんが運営する「自給農園ミルパ」を訪問、石井さん・平野靖識さんのお二人と交流させていただきました。

UNACはこの4年間、日本のODA事業「プロサバンナ（日本・ブラジル・モザンビーク三角協力による熱帯サバンナ農業開発プログラム）」に抗議の声をあげ続けています。「小農による農業は低投入」だから「低生産」だととして、それを「改善する」ために「海外からの投資促進による大規模農業開発を」とのコンセプトで始められた同事業が、小農たちの土地を奪う可能性があるからです。また、事業の進め方が不透明であり、「低投入＝低生産」と決めつけた「上からの開発」のあり方が現地の小農の実態を捉えておらず、主権を脅かすものだとして異議を唱えています。今回の来日したのは、同事業における状況が改善しないどころか、抗議の声をあげる小農たちに対する人権侵害が悪化するばかりの現状を、日本の政府そして市民に訴え、理解を求め、政策をなんとか変えたいとの思いから実現しました。

一方で、モザンビークから遠く離れた日本にも自分たちの置かれた状況に共感・理解してくれる人がいると知るとは励まされる、特に農や地域づくりに関わる人たちに出会い学びたいということで、このたびミルパを訪問させていただきました。

二人とも、やはり畑に出ると元気になります。恒さんの畑（ミルパ）では、昼食のための野菜を収穫しながら、水

を含んだいい土だと感嘆し、「モザンビークで作っているほとんどのものはここでも栽培できる！」などと盛り上がっていました。ジュスティナさんは、ミルパにある^{もみがら}籾殻で火を起こしてご飯をたく「かまど」に興味津々で、「私にやらせて」と一つひとつの作業を試していました。畑を歩きながら、あるいはお昼の用意をしている合間に、平野さんから三里塚闘争のお話をうかがった際には、「私たちがあなた方くらいの年のときに…」とのお話に、40代のコスタさんとジュスティナさんは「そんなに長く闘うの」と苦笑いしつつ、自分たちと似た状況下で闘う「仲間」の存在に勇気をもらったと、あとで話していました。

二人は学びにやってきたはずでしたが、恒さん平野さんのお二人に共通していたのが、コスタさんとジュスティナさんのおこなっている農業や、モザンビークの状況などについて興味津々で質問攻めだったことです。「学びにやってきた」はずの二人には、実は何よりもこのことが一番嬉しく、印象に残っていたようでした。

この二日前、参議院議員会館で院内集会を行った際、コスタさんが目の前に座るJICAと外



石井恒司さん コスタ・エステバンさん ジュスティナ・ウィレモさん

務省のプロサバナ事業担当官たちに対してこのように訴えました。「あなたたちに決定的に欠けているのは我々から学ぼうという姿勢だ。小農の支援をしたいというならば、まず我々のところに来て、座り、話を聞きにくるべきではないのか」。こんな当たり前のことが「国際協力」の冠かんむりのもとで行われる援助の現場では難しいのです。同じ日、ジュスティナさんはプロサバナ事業に反対していることで地元政府関係者に呼び出され、5時間以上拘束され、意見を翻すようにと圧力を受けた経験を話し、日本の援助のあり方を「悲しみの開発だ」と断言しました。

一方、恒さんが長い闘争を経て、今なぜ「自給農園ミルパ」なのかのお話をしてくださった際、こんなふうにおっしゃっていました。「ジンバブウェに行ったとき、彼らから“商業的農業”という言葉は初めて聞いて、自分の農業、自給のあり方をもう一回ちゃんと考えてみようと思ったの」。

自分たちの隣の国ジンバブウェに暮らすアフリカの農民から学んで、農業のあり方まで変えてみたこと、そして自分たちがやっている自給

農業の重要性を、なんとも当たり前のこととして語る恒さんの言葉が嬉しく、農民たちとともに闘い、走り続けてきた平野さんの実践がモザンビークには見



られないことで、お二人の今後に「興味がわいた」のだそうで、次回は泊まって、一緒にご飯食べて畑で作業がしたいそうです。その際にはまたよろしく願いいたします。

そして、自分たちの自給を中心とした農業の様子も見てもらえればということなので、ぜひ機会があればモザンビークにお越しいただければと思います。私自身、アフリカの農民たちとの活動を通じて自給農業の意味を感じながら、そこから「暮らしをよくしたい」とのコスタさんやジュスティナさんの思いにどのように応えたらいいのか、まだまだ悩んでいるところなので、お二人と一緒にモザンビークに来ていただきたいと思いました。

「標的の村」上映会

誰が犠牲になったのかを映し出す

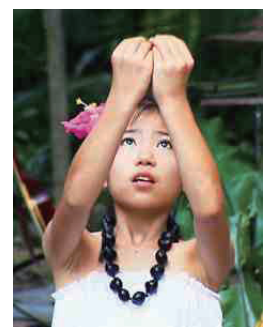
成田なりた平和映画祭主催で「標的の村」の上映会を行いました。モリンピアのホールには延べ300名の方に来場していただき、三上みかみ智恵ちえ監督にもトークをしていただきました。

「標的の村」は、緑あふれる沖縄・やんばるの森に突如ヘリパッドが建設されることになり、住人は反対するも、オスプレイは来てしまうというドキュメンタリー映画です。

印象に残ったのは、沖縄県民であろう機動隊員と基地に反対する県民が衝突しているのを、フェンスの中から米軍兵士が笑って見ているシーンでした。

同じ県民同士が分断され争い血を流す。僕たちの幻想的な平和は、こうした高江の住人の犠牲のうえに成り立つことを、改めて実感しました。

命は何かの犠牲の上に成り立つ事は自然の掟だと思えます。ただ何を犠牲にしたのか、それが本当に必要な犠牲だったのか？ 解らないまま犠牲のうえに成り立っているのは人間だけのような気がします。



「標的の村」はテレビや新聞には映らない、誰が犠牲になったのかを鮮明に映し出した、貴重な映画でした。

成田市在住・村民 清水祐治

※写真は「標的の村」公式ホームページから

成田空港大拡張計画で大騒ぎ 「住民すべて反対と言っても過言ではない」

成田市東峰住民 樋ヶ守男

住民不在の会議をくり返し、昨年9月、「成田空港問題に関する四者協議会」は、

- ① 2本の滑走路の新增設と独立運用、
- ② 新空港敷地約1000ヘクタール、
- ③ 発着時間を午前5時から夜1時までの20時間に拡大

という「空港機能強化案」を決定した。が、「決定ではなく提案」で「空港会社が地元住民への説明を行うことを県や市町村が了承する」、また「国・国交省は前面には立たず、地元決定に従う形をとる」と言う。みんな責任を問われたくないのが見え見え。それでも、空港の落とす金や「政治力」で「地元同意」がとれると踏んだのだろう。だから、「夜間飛行時間の3時間拡大、各滑走路10便の便数制限撤廃」を最終的に潜りこませたのだ。しかし、これが、「大騒ぎ」の始まりとなった。

補償や対策では「もうカバーしきれない」

10月から9つの市町で各種の住民説明会が行われている（2月20日までに約90回）。住民意見の多数が、新滑走路の是非や拡張問題以前の夜間飛行制限問題に集中しているという。本稿の見出しは、成田市の騒音関係団体では最大の成田空港騒音対策地域連絡協議会（騒対協）が1月11日、県知事に提出した要望書の一節である。「一日のうちわずか4時間しか睡眠時間が確保されないのはあまりに非常識。住民すべて反対と言っても過言ではない」と。「騒対協」は2006年のB滑走路の北側延伸や30万回への便数増大、2012年の深夜1時間延長など「空港の機能強化」で市当局と歩調を共にしてきた。その団体でさえ「住民すべて反対といっても」と、発着時間の再検討を求めているのだ。

また成田市議会は昨年3月に空港機能強化賛成決議をあげた（反対は3人）が、12月議会では9人が一般質問で、夜間飛行案への疑義・反対を表明した。また、南側の横芝光町町長も反対を表明している。横芝光町は中心部の住宅街が新滑走路の飛行直下にあたる。だから、「町

の三分の二が現空港の騒音区域。開港以来、人口減少が続く芝山町」の二の舞になりたくないと言うのだ。

「検討していないので答えられません」

12月15日、東峰でも「部落説明会」を開かせた。東峰は現在「空港予定地ではなく騒音激甚地区」のはずなのだが、対策は皆無に近い。東峰だけでなく「空港と地域の共生」にはほど遠い現実が、空港周辺の各所にある。それを無反省で「空港大拡張」などたわごとと、笑い声も出た。また、

- ① 国交省の2030年代需要予測に従っても羽田空港で計画中的の新E滑走路ができれば成田拡張分は不要になるはずでは？
- ② 補償や工費など総費用予測はいくらになるのか。一兆円近くになるのではないか？
- ③ それで本当に採算がとれるのか？

など、基本的な質問も出された。ところが驚いたことに、「わかりません」「検討していません」との答え。どんな事業でも費用や採算性を試算しない事業計画などあるはずがない。さまざまな疑問や反対意見に、「次回は答えられるように」と、3時間ほどで再会を約束した。しかし最近、ある空港会社社員が「近頃の会社は、強制はしない、でも議論もしないんです」と言っていたのが、妙に腑に落ちて仕方がないのだ。

「四者協ではなく五者協にしたらどうだ」

結局、大拡張計画は「住民のことを何も考えていない」から出てきたということだけはよくわかった。夜間飛行案にしても、LCCや貨物会社の希望がおおもと。「24時間でなくても20時間でほぼ需要がカバーできるから」というのが大きな理由で、住民の健康被害などは何ら検討されていない。ここにきて「騒対協」の役員会でも、「四者協ではなく、9市町の住民らを入れた五者協にして、検討をやり直せ」という声が上がりに始めたという。

✉ 村民からの手紙 ✉

養鶏と野菜の二本柱でやっています。

鈴木美羽

向春の候、梅^{うめ}の便りをちらほらと耳にする季節となりました。寒さも少しずつゆるみ、皆様ますますご健勝にお過ごしのことと存じます。

早いもので、私が愛^{あい}さん、香^{かおり}さんに続いて実験村研修生を卒業して10数年の年月が流れました。はるか昔のことではありますが…。

泊まりこみでのヒヨコの夜の見守り、蒸し鶏のおいしそうな香り、新鮮な豚の生レバー、しそジュースの美しい赤紫色、夏の休憩時のお楽しみ梅ジュース等と一緒に、めんどろを見て下さった方々の顔がハッキリと浮かびます。当時は、拠点である出荷場が滑走路のすぐ隣でしたので、離着陸時の騒音や振動もかなりのものだったと記憶しています。

前置きが長くなりましたが、栃木に移り住んだきっかけは、東京都内で開催された「全国農業者フォーラム」でした。住み込みで働ける養鶏農家の方と知り合い、そこで数年、お世話になりました。

その後、新規就農者が集う会合で複合経営農家とご縁^{うつのみや いちかい}があり、宇都宮市から市貝町へ移り住みました。私が入った当時は農業研修生が5人もおり、大変にぎやかでした。今は卒業して全国各地でそれぞれの生活を築いております。その後も数名が農業を学びに農場を訪れ、それぞれ2～3年で新天地へと羽ばたいて行きましたが、当時は養鶏と野菜栽培に加えて豚の生産にも力を入れていましたので、気の抜けない作業がたくさんありました。

豚のお産のときには担当者が夜通しで付き添い、夏場の豚肉のカット作業はよりスピーディーに行わなければならないし、若い豚は出荷用トラックに乗るのを拒むことも少なくありません。普段はおとなしくて愛すべき生き物ではあるのですが…。

2年目からは、養鶏と野菜栽培の二本柱になりました。農場主夫妻と私の3人で回すには、

ちょうど良い規模だと思います。

小麦粉も自給分プラス・アルファを確保できております。でも主食の米は、畑の真中に重機で掘った手作りのミニ水田で作るのでオマケ程度ですが、贅沢は言えません。

春の訪れを感じても、まだまだ朝夕は冷え込みます。体調を崩されることのないようお気をつけ下さい。



「村民からの手紙」 大募集です。

村民の近況、お知らせ、提案などなど、村民のみなさんからの手紙を募集中です。

現地の企画や行事になかなか参加できない村民のみなさんも、手紙でいろんなことを知らせて下さい。

【手紙の送り先】

〒286-0046 千葉県成田市飯仲297-4

平野 靖識

【中野芳明さんを追悼する】

成田空港問題の初期から反対派支援者として活動。通名を雨宮^{あまみや}と名のつた。‘91～‘94年の成田空港問題シンポジウム・円卓会議では、反対同盟側スタッフとして参加。抜群の調整力の人だった。

反対同盟が提案した実験村構想が、当時の運輸省内に設けられた「地球的課題の実験村構想具体化検討委員会」で、国・空港公団・千葉県・地域代表が参加して議論された時、その人柄が認められ事務局員の1人となり、議論の取りまとめに尽力した。議論は1998年の『若い世代へー農の世界から地球の未来を考える』に集約された。

2月2日突発性肺線維症で亡くなった。
享年68歳。得難い同志を失った。
ご冥福を祈ります。

平野靖識・記

【編集ひこ〜記】

1月、突然の大雪の日に原発^{かかわぎき}の柏崎へ行きました。新幹線で長岡^{ながおか}駅までは時刻表どおり、その先の柏崎駅までは3時間ストップしたままの在来線。除雪がすむまで車内で待たされ、柏崎には予定より2時間近く遅れました。雪が小止みになっても、日本海からの風に煽られて積もった雪が舞い上がって吹付けてきます。地吹雪^{じふぶき}のような現象^{にいがた}です。新潟で何年か暮らしましたが、こんなのは初めてです。

さて、その夜の宴会には原発に反対している市議さんも参加。彼「すごい雪でしょう」、私「避難訓練するなら、こんな日にしたら？」、彼「そうだなあ」、別「原発が事故ったらさ、なんとか避難できても、もう戻って来れないんだよなあ」。

(Y)

～村民になってください～

実験村は、いまの社会のありようと、私たち自身の暮らしを足元から問い直そうという試みです。国際空港という巨大開発に抗し続けてきた三里塚の地を拠点に、人々と結びあいながら水を、土を、森を、人を大切にする“もうひとつの里”づくりをめざします。あなたもぜひ、村民になってください。

- 村民費 3000円
- 麦大豆畑トラスト 5000円
- 通信購読のみ 1000円

郵便振替

00140-3-92555

地球的課題の実験村

<問い合わせ>

電話/FAX

0476(26)1654 平野

メール:

jikken-mura@jcom.home.ne.jp

URL:

<http://yamasoft.jp/jikken-mura/>

【編集後記】

恒例「年次寄合」のご案内を掲載した通信68号をお届けします。

4月の第2日曜はまだ寒い日もありますが、年次寄合の当日はうららかな春の日差しの下、「夕立の森」で村民の皆さんの笑顔が見られるといいなと願っています。

(S)